



2014年10月1日
第551号

1部10円(組合員は組合費を含む)
郵便振替00960-7-117274

Tel (06)4793-0633 Fax(06)4793-0644 E-mail: info@ewaosaka.org http://www.ewaosaka.org

発行 大阪教育合同労働組合
Education Workers and Amalgamated Union Osaka(EWA)
発行人 酒井 さとえ
連絡先 大阪市中央区北浜東1-17 日本ワードデータビル8F

臨時的任用職員の 社会保険加入継続問題

9月16日に常勤講師等臨時的任用職員に対する1日空白問題(社会保険継続)について交渉が開催されました。

フライングは誰の責任か?

交渉冒頭で、本件が協議期間中にもかかわらず、大阪・堺の両市各学校現場で講師への意向調査が行われていた件の説明を求めました。政令市は「府教委への報告のためにフライングはやむを得ない」と言う一方で、府教委はこれを真っ向から否定、「大阪・堺の両市に正式に抗議した」という回答でした。どちらにしても組合との交渉をないがしろにする事態に変わりはない

一步前進! 年金継続、保険証返却の必要もなし



りません。

また、組合は、府教委が提案する前から、雇用(任用)の1日空白があっても社会保険継続する旨の要求をしていました。しかし、当時は実施に向けてシステム改修の検討をしていたが、まだ話せる段階でなかったという言い訳に終

始しました。その態度こそが不誠実であり、組合と誠実に交渉するよう抗議しました。

大阪府 政令市の異動は継続できない
実際の運用面でも問題が数々明らかになりました。継続できる空白を9日以内に限る提案では、病休代替で長期休暇の任用がない場合などは継続されず、さらに、社会保険の適用事業所が変わる場合(例えば府内小中学校 政令市、府立学校 政令市など)には、継続されません。

9日以内の件は、柔軟な対応を求めるとともに、政令市等への移動については、そもそも1日空ける必要がないこ

とを指摘。3月30日までの辞令を31日までに差し替える代替案を示しましたが、府教委は難色を示しました。年金が引き続くこととともに、健康保険証は現在持っている保険証を返却することなく引き続き使用できることが前進です。

問題は社会保険だけでない!

社会保険の継続は講師問題解決に向けた前進ではありませんが、一側面に過ぎません。本来、雇用(任用)を1日空けることなく再度雇用(任用)するなど、講師問題の抜本的解決が必要です。組合は引き続き問題解決に向けてたたかいます。井澤絵梨子(書記長)

池田北・咲洲高校 募集停止問題

9月3日、府教委が発表した「大阪府立・大阪市立高校再編整備計画に基づく2016年度実施対象校(案)」において、府立池田北高校を2016年度入試から募集停止としました。これに対して高校支部は9月16日、府と府教委に対して案の撤回を求める要望書を出しました。

セーフティネットの

役割担う池田北高校

池田北高校は1984年に池田市のいわゆる「地元校」として地域の住民や中学校の要望で誕生しました。そして、創立以来、「地元校育成運動」の中で「障害」のある生徒も含めて多様な生徒の学習を保障し、人権教育に力を入れてきました。近年は定員割れの

府教委 定員割れ理由に2016年度募集停止へ!?



状況の中で、他の公立高校の入試で不合格になった生徒や私立高校へ行けない生徒を2次募集でたくさん受け入れてきました。府教委は、今回の募集停止校の選定理由で「(池田北高校の)募集停止を行った場合においても、周辺校をはじめ他校での受け入れは可能である」としていますが、定員割れをしない学校では、真のセーフティネットとしての役割は担えないでしょう。

咲洲高校も募集停止

今回の案では咲洲高校も募集停止、2校のエンパワーメントスクールへの改編、4校の普通科総合選択制から普通科専門コース設置校への改編も発表されました。各校の教職員が、何年もかかって作り上げてきた学校体制とカリキュラムを、いとも簡単に上からの指示で改編することは、全く「教育」的ではありません。

募集停止案撤回を求め運動開始

池田北高校と咲洲高校の保護者と教職員有志は、募集停止(廃校)案の撤回に向けて動き出しています。

池田北高校は、私が昨年度まで15年間勤務した学校です。11月の教育委員会会議での最終決まで、再編整備計画案の

定見直しに向けて私も動いていきたいと思います。

増田俊道(高校支部)

当面の日程

10月6日(月)18時半 中之島公園女性像前 秘密保護法反対! ロックアクション

10月7日(火)18時半 エル・シアター 在阪法律家8団体共催 STOP!!「残業代ゼロ」集会 **参加無料・申込不要**

10月8日(水)18時開演 エルシアター「安倍さん、橋下さんもうゴメン! 10.8集会」参加協力費500円

10月20日(月)16時 大阪地裁809号法廷「2012講師雇用継続団交拒否事件第4回弁論

傍聴支援をお願いします。

10月27日(月)18時 組合事務所 本部委員会&非正規公務員問題学習会(総務省7月4日通知について)

多くの参加を期待しています!

韓国・民主労総全北本部 訪日団歓迎会

韓国・学校非正規労働組合と交流深める

9月20日、大阪においてユニオンネットとヨンデネット共催により韓国の労働組合である民主労総全北本部訪日団を迎えて意見交流と交流会が行われました。



日韓連帯の歴史を知る

意見交流会は日韓の労働者交流のきっかけとなった25年前の「アジア・スワニー闘争」（香川県に本社を置く手袋メーカーの韓国工場が1989年に労働者を解雇し、日韓の労働者が連帯して闘った争議）の記

録ドキュメンタリーの視聴から始まりました。捨て身の覚悟で日本で争議を行う若い女性労働者と、彼女たちを支援する日本人々のインタビューを中心に撮られたドキュメンタリーには、25年という歳月を経ても色あせることのない

連帯の尊さを感じました。

学校非正規労働者との交流

訪日団の中には学校非正規職本部から支部長のチェ・ヨンシンさんも参加しており、韓国の非正規学校労働者の実態についても話を聞くことができました。韓国政府は2015年までに公共部門で働く常時・継続的な非正規労働者を無期雇用へ転換すると発表しています。しかし、実態はまだ非正規労働者は増え続け、転換しても「無期雇用の非正規」

にとどまり、給与や待遇面で正規労働者と大きく差がついている状況とのことでした。そのようななか、4年前に組合を結成し日々闘っておられます。

チェさんは「日本には非正規学校労働者を受け入れる組合はない」と聞いておられたようですが、教育合同は正規・非正規に関わらず教育現場で働く労働者は誰でも入れる組合です、と正しく伝えておきました。

酒井さとえ（執行委員長）

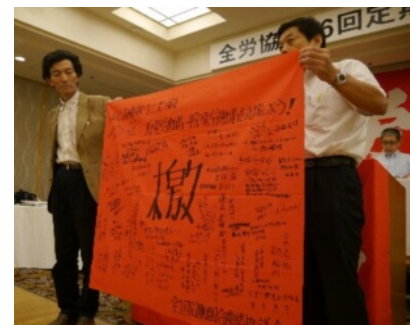
「権利を拡げ、差別を許さない」闘いを広げよう！

～全労協第26回定期全国大会開催～



「海外に出稼ぎに出かけ、外貨を得て国の家族に送金しなければ生活出来ない人々の状況に疑問を抱かず、安易に外国人の活用を謳う安倍政権の政策には傲慢さを感じる」と発言し、この問題を真剣に議論する必要性を訴えました。

福島に仲間へ檄布を送る 全国一般福島連帯労組といわき自由労組に、応援のメッセージが書き込まれた檄布が送られました。福島で被曝労働者・除染労働者の労働相談に応じている労働組合は、この2労組のみであり、全労協の取り組みへの期待はますます



す大きくなっています。最後に読み上げられた大会宣言では、「貧困と生活苦そして戦争のきな臭さが漂う時代、労働組合の役割は大きい。まずは労働者の分断をくい止め、団結をつくり上げなければならない」「また国境を超えた団結によって、労働者同士は殺し合わない。愛国心を競い合うべからずだ」とのメッセージが印象的でした。暴走する安倍政権に対抗するため、改めて労働組合が担う役割の大きさと、具体的な課題を確認した定期大会となりました。

大椿裕子（副執行委員長）

9月21日・22日の2日間、全労協第26回定期全国大会が熱海で開催されました。開会にあたり、金澤議長ならびに来賓の方々から、労働法制の改悪、特定秘密保護法や集団的自衛権行使容認などに見られる戦争の出来る国づくり、そして川内原発の再稼働に向けた動きなど、安倍政権に対する強い危機感が語られました。

政府による大学自治への介入と「女性の活用」について指摘 今年度の活動方針について、2日にわたり活発な議論が交わされました。教育合同代議員からは、「教育関連労働者のたたかい」の方針に関し、国家による教育への介入として、教授会による大学自治を否定する学校教育法の改正や、学長選の廃止を謳う国立大学法人法の改正、少子化に伴う大学の倒産も、重要な課題として位置づけておく必要があるとの提案がなされました。また、「労働法制改悪とのたたかい」の方針に関し、政府が打ち出す「女性の活用」と「家事支援人材の活用」について、「この二つはセットであり、その根底には、未だ女性が家事労働を担うという発想がある」と指摘しました。

文化おちこち (137)

おちこち映画館

【第3回『死刑台のメロディ』】

その時、ぼくは高校3年生、映画ファンは知る人ぞ知る今はなき堂島の大毎地下劇場の客席に座り、反戦歌をうたうフォーク歌手（今から言えば中川イサトだったか）の歌声を聴きながら、そのあとに予定されていた本作の試写上映をジリジリと待っていた。

そのころぼくたちは、当時の「アメリカン・ニューシネマ」と呼ばれる作品群をワクワクして観ていた（『俺たちに明日はない』『カッコウの巣の上で』『わらの犬』『ソルジャー・ブ

ルー』など）。総じていえば、ジョン・ウェインに象徴される白人男性中心の「強く正しいアメリカ」を否定しようとする感覚が共通していた作品群だ。

だから、ジョーン・バエズの「勝利への賛歌」が作品中に流れる本作もてっきりその一つと思い込んでいたが、あとで調べてみるとイタリア・フランス合作映画である。

1920年、アメリカ・ボストンで2名が殺害され多額の現金が強奪されるという強盗事件が起きた。やがてその「犯人」として、サッコとヴァンゼッティという名の二人の貧しいイタリアからの移民労働者が逮捕される。冤罪であり、多くの国際的抗議の声にもかかわらず、二人は処刑されたという史実をイタリアのジュリアーノ・モンタルド監督が描いた作品である。

二人は、当時アナルコ・サンディカリストとして移民労働者の間で運動していた。そういう二人を「異端分子」として排除しようとする当時のアメリカ社会は、100年近く経った今のどこかの社会と似ていないか？

前回当コラムで紹介したケン・ローチの問題意識を数十年早く先駆的に実践した作品ともいえる。 (1971年、イタリア・フランス) (啓)



「原発はクリーンで安全」「イラクは大量破壊兵器を隠している」「派遣は自由な働き方」どれもこれも誤報

だった。そしてどれもこれも自民党が吹聴してきたものだ。この誤報にもとづき直接的間接的に多くの人が殺された。安倍さん、これが「美しい国」ですか

